

引揚船

福岡市東区 白杵 末雄

私は終戦後引揚船の乗組員でした。昭和20年秋マッカーサー司令部より突然『横浜に直ちに集結せよ』との電報が来ました。戦時中輸送船に乗っていたのでと思い、船舶運営会博多港支部（乗る船は無くとも籍はおいていた）へ出頭しましたら直ちに門司支部に行くよう司令がでました。門司には九州各県から同じ電報を受けた人が約30名位いました。そこで横浜集結の事情が分かりました。米軍の船に乗ることでした。当時の汽車での移動は地獄の旅でしたが無事横浜にたどり着きました。宿舎に入ると全国から数百名集まっていました。懐かしい友人とも巡り会い、再会を喜びながらも死んで行った友人達の悲しい消息等で夜更けまで話がはずみました。

翌日今後の予定の通達がありました。「海外の邦人の祖国引き揚げに尽力してもらいたい。これは日本政府だけでなく米軍司令部の命でもあり、よほどの事情ないかぎり承知してもらいたい」。邦人のためでもあり、また国内は乗る船も無く衣食住も無しの時代でしたので喜んで承知しました。日本の船はほとんど海の藻屑と消え、数百万人の輸送には不可能な状態でしたので、米軍の船（200隻だったと思う）を借りて輸送することになり、その船に乗るために全国から集めたのです。船はリバティ型（貨物船8000t）、LST型（上陸用舟艇3000t）各100隻を借り、私はLSTに乗り組みました。米国海軍乗員が置いて行った私物、衣服、菓子、食糧、化粧品、等々当時の日本の事情と比べ唯々驚きの日でした。翌日より操船に慣れるためのミーティング、訓練が始まりました。引揚輸送するため、マッカーサー司令部、日本政府、私ども乗組員のことを思い出しながら書きました。いよいよ引揚者を迎えに1回目はコロ島（錦州の近く）に向けて出港しました。

コロ島には旧満州の邦人が集結している所です。着岸して待機している邦人を見ると、働き盛りの男性は召集されて戦後はソ連に連行され、大半は老人、子供、女性（女性は身を守るため頭はざんざり）着てる服はボロボロで食事もまともに取ってないようで、痩せ細って生気が無く、わずかな荷物を大事そうに握りしめてる姿を見て、私は心の中で迎えに来たぞ、一緒に祖国へ帰ろうと叫びながら目頭が熱くなるのを必死にこらえました。LSTは約1000名乗せることができます。さあ乗船が始まりました。うれしそうに乗って来る人、抱きかかえられた人、おんぶされている人、力無くとぼとぼ、千差万別の乗船風景でした。乗船が終わり次第出港、文字通りピストン輸送です。船内を巡回して感じたことは祖国へ帰れる喜びもあるようですが、大半の人がソ連に連行された身内の人や、移動中に別れ別れになった肉親や、身を切られる想いで赤ん坊を現地の人に預けて来た人、住み慣れた土地を離れる寂しさ、また祖国へ帰っても故郷はどうなってるか、身内は知人はと、また始めて日本へ帰る人など、心配で横になっても眠れない様子でした。

船は祖国へ祖国へと白波をけって航跡を残して進みますが、また残酷な試練が待ち構えていました。それは船酔いです。ほとんどの人が嘔吐、その臭いとうめき声等で船内は地獄のようでした。出港数時間後に襲いかかって来た無情の時化に翻弄された夜のことでした。

私どもは、引揚者の名簿で自分の故郷の人を捜して勤務の暇に慰問に行きました。私も早良郡田隈村（現在の早良区田隈）の出身でしたので近所及び福岡市内の人を名簿で捜したら市内出身の方が3人いました。早速捜し尋ね船室に連れてきて白いおにぎり（当時は最高）を御馳走し色々な話をしましたが、特に覚えてるのが、3人のうち2人の帰る町は焼け野原になったことを心苦しくも告げたことです。2人の落胆に、告げるんではなかったと後悔した事を覚えています。

色々な問題を抱えながらも船は刻々と祖国へ向かって進みます。出港して数日後、船内放送で「引揚者の皆様前方に見える山は日本の山です。もう少しの辛抱です頑張ってください」（五島列島だったと思います）これを聞いた引揚者の方達で動ける人は甲板に上がって「万歳万歳」と叫ぶ人、感極まって泣く人、じいっと身動きせず見詰めてる人等々、そのうち甲板上で合唱が始まりました。それは、『兔追いしあの山』の「故郷」でした。船は佐世保に無事入港し、頭から体全体を真っ白にDDTをかけられ下船されました。

それから約1年半ぐらい、コロ島、ターク（天津の近く）、青島等中国各港より佐世保、長崎、博多、仙崎とピストン往復しましたが、忘れもしない思い出があります。それは中国最後の引揚げが私どもの船になりコロ島にむかいました。最後の引揚げと聞いたときはどんな人が乗るかと思案して、もしかしたら李香蘭（山口淑子）が乗らしたいと噂をしながらコロ島に着きましたら、何と栄養失調で動けない人や病人ばかりで取りあえず臨時の病院船となりました。手製の担架で同胞の肩につかまり、タラップの手すりにしがみつきながら、私達も手助けしながら船内へ案内しました。乗船が終わり祖国へ向かってコロ島を後に出港しましたが、佐世保までの航海中2～3人ぐらいだったと思いますが、祖国を目の前にして無念の涙を飲んで天国へ旅立たれました。遺体を連れ帰ることは外国のウイルス、病原菌など日本に上陸させることとなるため、遺体を毛布でくるんで錨をつけて水葬しました。

暗い話ばかりでしたが、明るい話もあります。この頃内地では田端義夫の引揚げにぴったりの「かえり船」、並木路子の「りんごの歌」が流行していました。この2曲を甲板上でよく唄ったら、引揚者の方達から教えてくださいと注文がありましたので、白いシートに歌詞を書いて見やすい位置に張り付けて一緒に唄いました。数時間後には引揚者達だけの合唱が始まり、笑顔で唄ってる人、涙を流しながら唄ってる人、黙ってじいっと聞いている人、さまざまですが確かに船内は明るくなってきました。他に楽しみがないし、内地に着くまで人が集まれば合唱です。なぜか昼は「りんごの歌」、夜は「かえり船」の方がヒットしてました。こうして私達の中国関係の輸送が終わりました。残留孤児のニュースを見るたび、あの大陸からの引揚者の悲しそうな顔が浮かんできます。1人でも多く肉親との対面が実現するよう祈ります。

引揚船の任務が終わり、今度は復員船となり、沖縄を始め南太平洋の連合軍の基地にPW

(旧軍人軍属で収容所に収容されてる人)の輸送に従事しました。一般邦人と違って男盛りで、また収容所の待遇が良かったのか皆元気良く、またこれ以上持てないような荷物を抱えて乗ってこられました(但しこの荷物は米軍の物資)。身に着けてる衣類も米軍の物だから上陸時(名古屋港)で殆ど没収されまして、復員局より支給の旧軍服に着替えて、下船され故郷へあるいは知人を訪ねて発って行かれました。

約50年近く前のことですし思い違いもあるかと思いますが、当時の体験を思い出しながらまとめました。